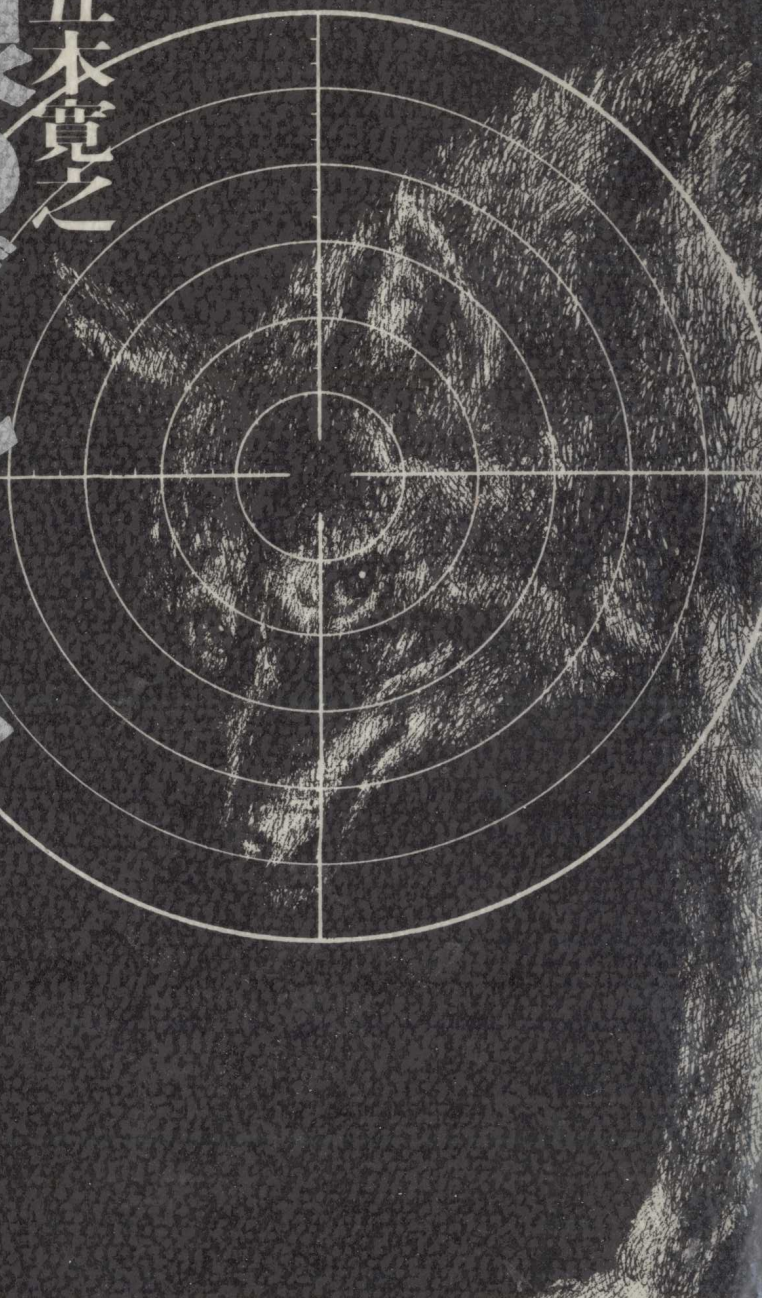


狼のブルース

五木寛之



五木寛之

狼のブルース



狼のブルース 五木寛之 発行者 野間省一
390円 発行所 株式会社講談社



昭和45年4月28日 第1刷発行
昭和45年12月20日 第6刷発行

東京都文京区音羽 2-21-12 〒 112

電話〈大代表〉東京 (942) 1111

振替 東京 3930

印刷所 豊国印刷

製本所 株式会社国宝社

©HIROYUKI ITSUKI 1970

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

目次

けもの同士	5
無籍局員	21
巨人番組	35
戦いの季節	48
夜の来訪者	62
七社連合策	78
凌辱者の血	89
暗い金色の目	103
暴力の美学	118
異常者の群れ	127
虚名と怒り	139

終わりの章	267
傷ついた狼	263
深夜の祭典	253
第三の攘夷党	239
吊いの秋	219
不吉な朝	206
黒い汚れた手	202
イカルスの夢	187
残酷な季節	176
鮮かな報復	164
終わりのなき狩り	151

装幀・イラスト
装幀レイアウト

日暮修一
鈴木邦治

狼のブルース

けもの同士

その男は、三時ちょっと前にやってきた。瘦^やせた、刺すような目つきの若い男だった。

事務所のドアをあけると、灰色のコートのポケットに手をつっ込んだまま、ささやくような声できいたのだ。

「黒沢先生で？」

「あんたは？」

黒沢竜介はソファの上に寝ころんで「北京週報」を読んでいた。ふりむきもせず、男にいう。

「足音をたてない歩き方をするようなお客さんは、あんまり好きになれないんでね。このままで失礼させてもらうよ」

「いいですとも」

男は椅子をひきよせると、さかさまにまたがって、煙草

をとりだした。

「先生の事務所が、こんなちゃちなビルにあるとは、思ってもみませんでしたよ」

「そうかい」

瘦せた男は、無遠慮な視線で室内を眺めまわした。

ホテルのシングル・ルームほどの部屋に金属製のデスクがひとつ。おなじく灰色のロッカーと、灰色のキャビネット。床は傷だらけで部屋の隅には、各国の雑誌や新聞が山のように積みあげてある。北欧版の「フェミニナ」誌とドイツの「シュピーゲル」の間に、ソ連の漫画雑誌「クロコジール」がはさまっていた。「ニューヨーク・タイムズ」と仲よく重なりあっている「赤旗」と「フレイボーイ」のヌード。

乾いていて、殺風景で、そのくせどこことなく風変わりな部屋だ。ドアのガラスに、「黒沢竜介事務所」と書かれた文字が裏から読める。

「ところで、仕事の話なんですが――」

「あんたは、こっちの質問にまだ答えていない」

「九鬼というもんです」

「知らない」

瘦せた男は、かすかに笑った。

「こっちは先生のこととは良く知ってる。それで充分じゃないですか」

「どう知ってるんだ。聞かせてもらおうじゃないか」

黒沢竜介が、はじめて目をあげて男を見た。手にもった雑誌を床に投げ、体をおこして坐りなおした。九鬼と名乗った男は、無意識に体を引いて黒沢を眺めた。

窓からさす五月の陽光が、浅黒い黒沢の顔に淡いスポットを作っていた。鋭く削げた頬。やや厚目の唇。暗いかげりのあるくぼんだ目。

黒沢竜介は、どこかに憂鬱ウツクそうな影と、酷薄な殺気を匂わせる、三十四歳の一匹狼だった。食物にはなく、なにかもっとほかのものに餓えているものの気配が、顎あごのあたりに漂っている。

「そんな目で見るのはやめてくれよ、先生」

と、九鬼という痩せた男が目を伏せていった。「おれはただ仕事を頼みにやってきただけだ」

「帰ってもらおうか」

と、黒沢がいった。「おれは、いま読書中なんでね」

「話も聞かないで断わるのかい」

黒沢は、またソファーの上に横になった。床の雑誌を拾いあげページをめくる。

「南郷さんの使いできたんだぜ」

と、九鬼の押し殺した声がした。

「なに？ 南郷——」

黒沢竜介の手から雑誌が落ちた。彼は静かに体をおこし

て男を見た。その目が、かすかに残酷な光をおびて細くなっていた。

「南郷義明氏の名前は、いぜんから知っている」

黒沢は立ち上ると、窓の所へいって外を眺めた。「こんな商売をやっている以上、一度はどこかで会うことになるだろうと思っていたよ」

黒沢の目の下に、薄汚れたストリップ劇場の楽屋口が眺められた。階段の所に、あばら骨のすけて見える踊子が坐っている。彼女は裸のままレース編みをやっていた。表通りのほうから、自動車のクラクションと、都電のレールのひびきが伝わってきた。おだやかな初夏の午後だった。

新宿御苑の方角へ飛んでいく鳩の群れを目で追いながら、黒沢は頭の奥で別なものを見ていた。いつか雑誌に出ていた、南郷義明の無気味な顔だった。

へ十三チャンネルTVを食った男」

たしか、そんなふうな見出しだったと憶おもえている。

「その南郷氏が、私になんの用かね」

黒沢がきいた。

「いちど会いたいとおっしゃるんで、それで、先生をお連れしてくるようにと——」

「いつだ」

「今すぐにでも」

黒沢は肩をしかめて腕時計を見た。夜光時計の針は、午

後三時をさしている。

「今はだめだな」

「なぜです」

「おれの助手が六時に帰ってくる。その報告を受けたあとでなら、おつきあいしよう」

九鬼は軽くうなずくと、ほっとしたように立ち上った。

「それじゃ六時半にまたお迎えにあがります、先生」

「いいだろう」

南郷の使者は、ドアをていねいにしめて帰っていった。

やはり足音をたてない歩き方だった。灰色のコートを着た山猫の歩き方だ。

「ああいう臆病な男が、簡単に人を刺したりするのだ」

と、黒沢は思った。一度、あれとそっくりな型の男に、やられそうになったことがあった。もう六年も前の事件だが、思い出すたびにいやな気分になる。

「あれはW映画の時だった——」

当時、組合の強かったW映画に招かれて、経営者が顔色を変えるほどの大量首切りをやった時のことだった。

あぶない目に会ったことは、ほかにもある。Rレコードに頼まれて、競争会社の大物タレントをこっそり引き抜いた時も、そうだった。

S労音が、興業権の問題で関西の暴力団組織ともめた時もそうだ。今でも、まだ安心はできないだろう。

その時、廊下で軽い足音がした。ドアが開いて、綺麗な外人の娘がはいってきた。

足首のキュッとしまった、すんなりした体つきの娘だった。

体の曲線がそのまま見えるニットの服を着て、スウェードの靴をはいている。少年のように短く刈りあげた、柔らかな褐色の髪。膝上五センチのスカートからのぞく形のいい脚に可憐なセックス・アッピールが匂う。

少し上むきかげんの鼻と、よく動く目。ふっくらした唇に、いたずらっぽい微笑をうかべて、

「どうかしたの？ 先生」

歯切れのいい日本語だった。

「少し帰りが早すぎるんじゃないのか」

「早くて悪かったかしら」

「仕事さえちゃんとすれば文句はないさ」

「じゃあ文句いわないで」

軽快な足どりでデスクに近づくと、手にもったバッグの中から分厚い書類の束を取り出して、ヒュッと口笛を吹いた。

「あの男に関する資料は、全部ここにそろってるわ」

黒沢は彼女の手から書類の束を受け取り、椅子に坐ってページをめくった。

「なるほど。あいかわらず大した腕じゃないか、マリ」

「ありがとう」

マリと呼ばれた娘は、靴をぬぐと猫のようにソファに寝そべった。脚を組むと、スカートから白い肌がこぼれた。窓からさしこむ淡い陽ざしの中に、うっとり目を閉じて、

「あたしのいない間に、だれかきたのね」

「なぜだ」

「先生のところがうへアートニックの匂いがするわ」

「女性の客だった」

「それは嘘」

自信たっぷりに断言して、マリは黒沢をみつめた。「だれがきたの？」

黒沢は答えなかった。黙って気難しい横顔を見せたまま、書類をめくっている。

「だれがきたの？」

と、彼女はくり返した。黒沢は溜め息をついて、ソファに起き上っている助手を眺めた。十九歳の混血の娘、水島マリ。二年前までハマのスベ公の輝けるリーダーだったマリは、いいだしたら後へ引かないところがある。

「南郷義明の使いの男がきた」

「南郷？」

「知ってるのかね」

「南郷がなんていってきたの？」

「おれに会いたいんだそうだ」

「いつ？」

「今夜だとき」

マリは素早くソファから立って、黒沢のそばへやってきた。黒沢が目をおけると、おびえたような声でマリがささやいた。

「いかないうがいいわ、先生」

「なぜ？」

「なぜでも」

マリの目の奥に、奇妙な哀しみの色を黒沢は見た。「南郷とかかわり合うのは、よしたほうがいいと思うわ」

と、マリはいった。言葉を舌で押しだすような、ぎこちないいい方だった。

「なぜかね？」

「……………」

マリは窓際にいって外を見おろしながら、

「なぜってわけじゃないけど——」

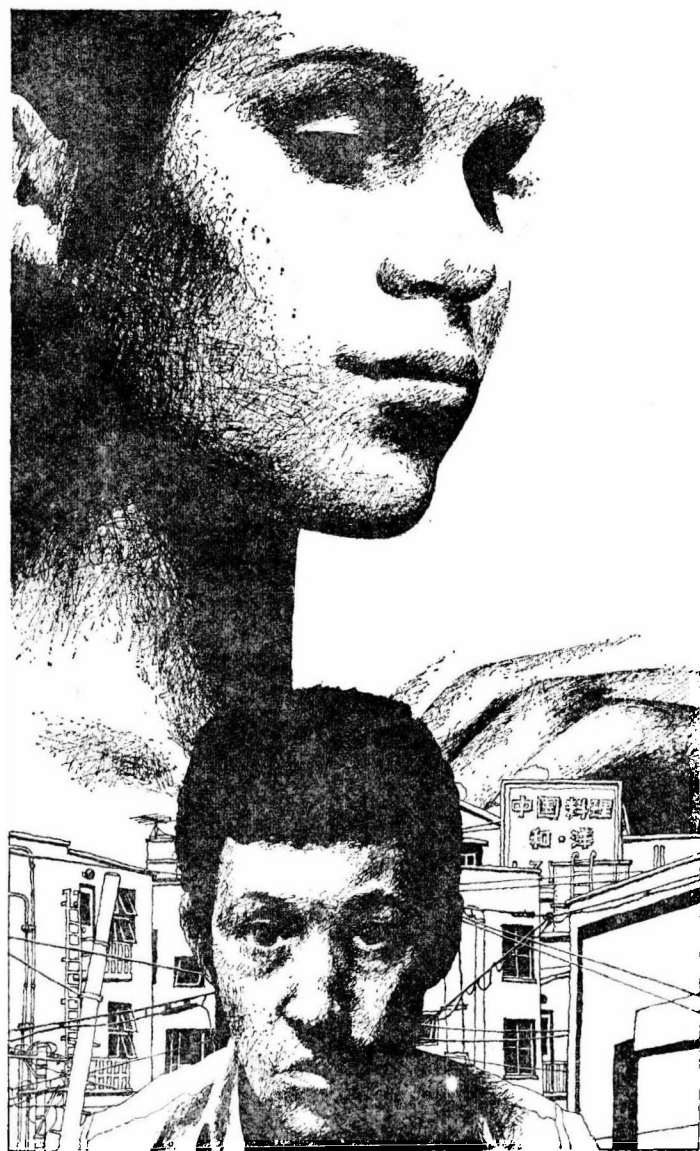
黒沢が、なだめるような口調できいた。

「南郷についてどんなことを知ってるんだ、きみは？」

彼女は黙っていた。ふだんはマシーン・ガンのようにひとりで喋りまくるマリだが、今日はなんだか変だった。

「いいたくないわ」

それだけボツリとつぶやくと、後は石のように黙りこん



でしよう。

「聞かなくてもわかつてる」

と、黒沢は低い声でいった。自分にいい聞かせるような、醒めた口調だった。マリの形のいい脚と、果物のような腰のふくらみを目で追いながら、彼は頭の奥で別なものを見ていた。それは夜の沼地をさまよう一匹の飢えたハイエナの姿だった。南郷義明——それが、そのハイエナの名前だ。

参議院議員南郷義明、五十八歳。放送代理店会長、音楽著作権協会顧問、貸しスタジオ社長、芸能プロダクション代表、女子高等学園園長、そのほかにも彼の肩書きは、いくつもあるらしい。

その経歴を正確に知っている者は、ほとんどいないだろう。戦時中、大陸で軍属として働いていたという南郷が、戦後二十年の間に、どのようなコースをたどって現在の地位をきずいたかは、だれにもはっきりしないのだ。

だが、彼の本当の職業が、その肩書きの背後にあることを、黒沢竜介は知っている。

南郷は資本主義社会の深部を、足音もたてずにうろつき回る食欲なけものなのだ。黒沢竜介もそうだった。企業の患部にもぐりこみ、事件を起こしたり、事件をまとめたりする。そして依頼主から、巨額の報酬を受け取る。それが彼らの本当の職業だった。

だが、黒沢は南郷のように、その商売を他人の目から隠そうとはしなかった。

〈おれは事件屋だ〉

と、黒沢竜介は自分にいい聞かせていた。〈おれは事件屋だ。それで充分だ。南郷みたいに名士になる必要はない。金のために相手を倒し、そのうち倒されて、すべてが終わる。それがおれの人生だ。それだけだ〉

「南郷とかかわり合うのは、危険だわ」

マリがふり返っていった。「やめて」

「六時半に迎えにくるんだ」

と、黒沢はいった。「おれはいくよ」

彼は電気剃刀を引出しから出すと、コードをさしこんだ。軽い唸りが静かな部屋にひろがった。彼が電気剃刀を頬や顎のくぼみに強く押しあてるたびに、その唸りは高くなったり低くなったりした。

〈マリのいうとおりかもしれない〉

黒沢は思った。〈なんだかいやな予感がする〉

六時半きっかりに、九鬼が迎えにやってきた。九鬼はマリを見て、びっくりしたようだった。無理もない。たいていの客が、マリを外人だと思う。横浜生れの混血児で、れっきとした日本国籍の娘なのだが。

「お客さんで？」

「おれの助手だ、気にしなくていい」

「はあ」

さっき黒沢の前で凄^こんでみせた九鬼が、おかしいように固くなって、もじもじしている。

マリにみつめられると、かすかに赤くなった。照れかくしに煙草をくわえて火をつけている。

黒沢はそんな九鬼を、にやにやしながら観察していた。人ひとり眠らせるぐらいなんとも思っていないような男の中にも、意外に女が苦手という連中はいるものだ。それにマリは格別だ。もう二年も一緒に働いている黒沢でさえ、時におだやかならぬ気分になることがある。

「後はたのむ。七時までいて、連絡がなければ帰っていい」

「……………」

マリは答えなかった。唇をかねで横を向いたままだ。黒沢はマリの肩を軽く叩いて、部屋を出た。九鬼が素早く先に立った。

ビルの裏口に、黒いリンカーンがとまっていた。ボクサー犬のような体格のいい運転手が、黒沢の顔をじろりと眺めてドアを開ける。九鬼もうしろのシートに黒沢と並んで坐った。リンカーンは軽い溜め息のような排気音を吐いて、滑るようにスタートした。

「あの娘はいったい何者です？」

九鬼がきいた。好奇心を抑えかねた口調だった。「日本語がわかるんですか？」

「わかるとも」

「ほう」

九鬼は感心したように頭をふっている。

「マリは父親に似すぎたんだ」

と、黒沢は思った。マリの父親のジムは、生粋のニューヨーク子で、ブロードウェイでちょっとは知られた舞台美術家だったという。軍隊に引っぱりされて、終戦後、占領軍の将校として横浜へやってきた。

すらりと背が高く、物腰が優雅で、とても知的な目をした男だった。彼は、当時まだ小学生だった黒沢の、いとこに当る親戚の娘と恋愛して結婚した。そしてやがてマリが生れたのだ。

マリがまだ赤ん坊のころ朝鮮戦争がおこり、ジムは出かけていった。その戦争が終わる直前に彼は戦死し、シューラーフザックに防衛剤と一緒につめこまれて帰ってきた。

マリの母親は、彼女を施設にあずけて、働きた。彼女はジムとの結婚に反対した家族や親戚にたよるのが、いやだったにちがいない。

数年後に、マリの母親が交通事故で亡くなった。そこで彼女の伯母がマリを引き取ったのだった。

黒沢が大学を追い出されて、さまざまな職業を転々とし

たのち、やっと自分の事務所を持ったのは四年前である。その頃、マリはすでに横浜ではかなり有名な非行少女として生きていた――。

「着きましたよ、先生」

九鬼の声が耳もとでした。黒沢は素早く回想を断ち切って、顔をあげた。

かすかな夕暮れの気配がただよっている。黒沢が車をおりと、目の前に茶褐色の巨大なビルがそびえていた。その建物は、新しくできたホテルかなにかのように見えた。

「参議院の議員会館でして」

と、九鬼が階段を上りながらいう。「南郷さんは五階の事務所でお待ちです」

守衛に軽く手をあげて、九鬼は得意そうにエレベーターのボタンを押した。おりてきたエレベーターから、どっと男たちが吐きだされる。一目で地方政界のボスとわかる、バジを光らせた男たち。胸にリボンをつけ、おどおどと周囲を見回している見学団の一行。

議員の名前を染めぬいた手拭いを、首にまいた中年の女たちが、下駄を鳴らして通り過ぎる。これから地下の食堂へいって、カレーライスでもふるまってもらうのだろう。おらが国さの先生に、東京で豪華な夕食をごちそうになるというわけだ。

五階の廊下のいちばん奥に南郷の部屋はあった。

「ちょっと待ってくれ」

と、黒沢は九鬼を手で制して、

「手洗いはどこかね」

「こちらですが」

「南郷大先生とお会いする前に、髪ぐらいなでつけておきたいんでね」

黒沢がからかうような調子でいった。九鬼は苦い顔をしなからトイレットを指さす。

黒沢は洗面所の鏡の前に立って、自分と向き合っている鏡の中の自分を眺めた。

アメリカン・コンチネンタル調の、脇に浅いベンツを切った濃紺の背広と、浅黒い肌。やわらかくプレスした白いドレスシャツ、黒いタイを細目に結んでいる。濃い眉がナイフのようにのびていた。その下でかすかに充血した暗い目が自分をじっとみつめている。

堂々たる体格、というのではなかった。だが、無駄のない引き締まった体つきだった。

黒沢自身、学生の頃からこれといった運動をやった経験はなかった。ボクシングや、空手や、レスリングなどといったスポーツを、彼はそれほど戦術的な競技とは思っていないのだ。彼は自分の筋肉や反射神経をトレーニングするより、自分の意志でそれを支配することを考え続けてきたのである。

大学三年の時、彼は北陸の永平寺を訪れて、その巨大な禪寺の空気に強く惹かれるものを覚えた。そして、その年の秋、ふたたび永平寺へ現われた彼は、そのまま大学へはもどらなかつたのだった。雪と烈風の中で、二十二歳の黒沢は、肉体を精神力で極限までコントロールすることを試みようとしていた。

その深山の寺は、ひとつの小さな独立国家だった。雪に埋もれた深山に、数百人の青年たちが裸足で働き、なにかを求めて坐り続けていた。それは、テレビが全国にうごめきだした頃であり、ベトナム人がフランス人を追い出そうとしていた時期でもあった。太陽族という新しい英雄が生まれ、ジェイムズ・ディーンという青年が死んだ年でもあった。そのような現代の息吹^{いきぶき}と、断絶することで、黒沢は本当のなにかを掴もうとしていたのだ――。

トイレットの前で九鬼がじりじりしながら待っていた。ゆっくり出てきた黒沢の顔を見て、皮肉たっぷりにいう。

「どうしたんです、先生。南郷さんに会うからって、固くなる必要はありませんぜ」

黒沢はそれを黙殺して、さっさと突き当りの部屋のほうへ歩きだした。九鬼があわてて先に立った。部屋の前で、ちよっとネクタイの結び目に手をやってから、ドアをノックする。

「どうぞ」

頭の上のインターフォンから女の声が聞こえた。くせのある甘い声だ。

九鬼がドアをあけ、黒沢に目くばせした。最初の部屋は、ただのオフィスだった。事務机と、その前に坐ってこちらを見ている若い女。いや、若く見えるが、実際には三十を過ぎているにちがいない。うまいメイキャップで、良く熟した水蜜桃^{すいとうもも}みたいに魅力的に見せているのだ。黒沢の顔を、濡れた視線で吸いつくようにみつめて、

「黒沢竜介さんでいらっしゃいますね。南郷がさきほどからお待ちしております」

ピンクの舌が、少しめくれ気味の上唇の陰でちらちら動く。「どうぞ、こちらへ」

カーテン・ウォールで仕切られた次の部屋へはいっていきくと、男が一人いた。窓際の机に向かつて、なにか読んでいる。頭のうしろに灰白色の頭髮がかぶさって、肩幅のせまい小柄な男の年齢を想像させた。

部屋の隅に、熱帯魚の水槽^{すいそう}があり、小型の見ばえの少ない魚が泳いでいた。マホガニーのどっしりした本棚。壁に本物らしい梅原龍三郎の桜島の絵が一点。ゴルフのセットが机の横に立てかけてある。その下に、手乗りリスのはいっている青い金属のかごが置いてあった。

黒沢は無造作に真ん中のソファに腰をおろした。そば

に立っている秘書らしい美人を見あげて、軽くウインクする。

「黒沢さんがお見えになりました」

と、彼女は歌うような調子でいった。机に向かった男は、全くなにも聞こえなかったように書類を読み続けている。

黒沢がテーブルの上の煙草ケースに手を出した時、椅子をうしろへさげて、男がゆっくりと立ち上った。

「リスに餌をやったかね」

貝がらをこすり合わせるような耳ざわりな声だった。

「あのリスどもが腹をすかせておる」

「はい、ただ今」

と、女秘書がおびえたような声をだした。

「よろしい。わたしがやろう」

と、その男はいい、机のそばをはなれて、黒沢の前に坐っていった。「あなたは動物がお嫌いですか」

「種類によりけりです。好きな動物もあるし、嫌いなやつもある」

と、黒沢が答えた。その男は乾いた奇妙な笑い声をひびかせながら、顔をあげ、正面から黒沢をみつめていった。

「わたしが南郷義明。ご存知とは思うが」

「黒沢竜介です」

と、黒沢は相手に向かって微笑した。「いつかはきくと

お目にかかるだろうと思ってましたよ」

「うむ」

南郷は椅子の背に軽く片腕をもたせかけて、黒沢を点検するような目つきで眺めた。黒沢も平靜な目の色で、南郷を見返した。

いま目の前にいるのは、五十歳の半ばを過ぎたと思われる、典雅な初老の紳士だった。ちょっと見ると、大学の教授か、学究タイプの医学者といった感じである。背は高いほうでなく、痩せて、全体に小柄な印象を受ける。健康な肌の色だが、その下にはどんな色の血が流れているのだろうか。

「あなたの噂は、いせんから聞いて知っていました。だが、こんなにお若いとはね」

南郷の口調は、まるで親しい友人にでも話すような暖か味を感じられた。

「十三チャンネルでは、ご活躍のようでしたね」

と、黒沢はいった。「あれは見ものでした」

「いや、お恥ずかしいしいです。わたしどもの仕事は他人に責められるようじゃ、いけないんじゃないですか。南郷が関係してるといふ噂が出るのは、失敗した証拠ですよ」

「なるほど」

南郷は立ち上ってリスのかごから一匹のリスを取りだし、手の上に乗せてもどってきた。